

明治期の古地図－烏丸半島辺りの原風景－

写真は、下物村(現在の下物町)を明治6年(1873)に描いた古地図です。この種の地図の作成は明治新政府による土地制度の大改革、地租改正法の公布に先立って進められていたもので、市域にもほかに多くの村のものが伝え残されています。

縮尺は600分の1で、本図の場合長辺が4メートルにも及びます。その内容は、土地割り一つ一つが線引きされ用途別に鮮やかに着色したもので、道路や河川、耕地や屋敷地などの位置を詳しく見ることができます。

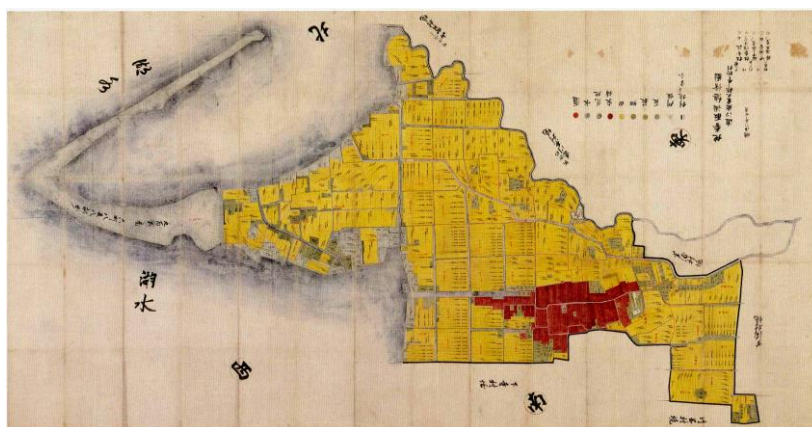
さて、下物町といえば、市立水生植物公園みずの森や県立琵琶湖博物館などが立地する烏丸半島からすまがあり、本市随一の湖岸の観光スポットとなっています。この辺りのかつての風景を、古地図でみてみましょう。

これによれば、現在の烏丸半島は写真左側にみえるように「く」の字状の「葭地よし」であったことがわかります。このような葭地が湖中に突き出していたのは、この地帯が砂嘴と呼ばれる砂の堆積地であったからです。そしてここには「烏丸」の字名とともに、地番と6町8反8畝歩の面積が記されています。すなわち、湖水と陸地の間的位置にあった葭地も、地目の一種として把握されていたことがわかります。

また、この地図をよくみると「く」の字の葭地へと続く水田地帯にも水路や葭地が入り組んでいる様子などが伺えます。一方、写真で色濃く見える部分は屋敷地で、現在の下物町の集落範囲とほぼ一致しています。

そのほかの部分で本村の多くを占める田地では、古代以降の土地区画である条里じょうりに従って規則的に土地割りされていたこともわかります。

以上のように明治期に詳細に描かれたこの種の地図は、これ以前の過去の歴史が刻みこまれた貴重な資料といえるのです。



下物村地券取調総絵図(明治6年)